

赤い手

国枝史郎

青空文庫

まだ真夜中にはなっていないかった。

が、豪華なウッドワードのアパートに漲る深々たる夜の静寂は、泥棒猫のようにこっそり忍び込んだスパイダー・マッコイの亢奮した神経を針のように尖らせた。ゴム底の靴は歩く度に高価な絨氈の中に深々と沈み、彼の熟練した眼には夜目にも素晴らしい調度品が感じられた。室から室を忍び歩く足の感じと時折照す懐中電燈の光だけで、スパイダーは家の中の様子をあらまし頭の裡にたたみ込んだ。

総べては彼が想像した通りだった。いや、サデイが彼に知らせた通りだと云った方がいかにも知れない。サデイはウッドワード夫人がフロリダ地方へ出立する以前、一ヶ月許り女中として住み込んでいた。そして彼女は室々の詳細の様子をスパイダーに知らせて寄したのだ。今その正確だったことが分ると、彼は舌を巻いて驚いた。

「サデイは利口な奴さ」と彼は呟いた。「その上、気が利いていやがる。あれでスラッグ・ドルガンに気がなければなあ」

彼はそう思うとスラッグが無上に憎くなつて来た。奴は此の数ヶ月と云うもの幾度仕事の邪魔をしたか知れやしない。だが何うして仕事を予め感付いたろう。誰か密告して

る奴がいるんだ——事情を詳しく知ってる奴が。スパイダーは今までついぞサデイを疑った事はなかった——が、あの女にも用心しないと不可いけないな、と彼は思った。

その時、幽かすかな物音がしたので、彼は蜂に神経を刺された様に、はっと我に返った。彼は全身の神経を緊張させて油断なく暗やみの中に佇んだ。が、やがて、気の精せいだったかも知れない、と独りで極めてしまった。

家うちの中には眠ねむりに就ついている二人の召使の外には誰もいない筈だった。夫人はフロリダ地方へ行っているし、主人は土曜日の夜はいつも日曜版が刷上るまで新聞社ならわにいる習ないだ。スパイダーは前々から念を入れて今日の準備を怠らなかつた。そして宵うちの中から家うちに眼をつけておいて、ウツドワードが自動車で事務所へ出掛けた後も、召使達あかりが燈火を消して室へ退くのを待っていたのだった。

懐中電燈の光は床から壁を這い廻った。

時間はたつぷりあつたから、決して急ぐ必要はなかつた。彼は安心して仕事に取掛ることが出来た。窓には日除が下され、その上都合のよい事にはどつしりした窓掛けさえ下されてあつた。彼は電燈のスイッチを捻ひねった。すると眼の前に突然華麗な室が現われたので思わず眼を瞠つむった。が、今はそんな事に暇をつぶしている時ではなかつた。やがて今宵の

目的物が眼に映った。それはサデイが云った通り室の端れに——グロテスクなチーク材の彫像が立っていた。

その彫像を予てから欲しがっていた胡買者のシモン・スヌツドはスパイダーに話を持ち掛けた。

「手に入ったら、お前には五千弗出すぜ」とスヌツドは約束した。

スパイダーに取ってはそれだけでも充分だった。併し巧くゆけばもう少し位出させることは出来るかも知れないし、スヌツドにしても愈現実に入るとなれば分前の高を増して呉れるかも知れない。だが、そんな事は後で何うにでもなる、それより今は代物を手に入れることが肝心だ、とスパイダーは考えた。

彫像が楽に持運びが出来る程の大きさなのを見てとると、彼は安心してにやりと微笑した。それは床から五呎許りの壁に設えた龕の中に納められてあった。淡い間接照明の光は、奥深い洞穴の様な感じを与えていた。所が龕の直ぐ前には長楕円形の金魚鉢があったので、スパイダーは先ずこの鉢を除けてからでなければ彫像に手を触れることは出来なかつた。よく見ると鉢の中の金魚は拵え物だった。

「ちえツ」彼は忌々しそうに舌打した「だが器用に出来てるなあ。俺は真物とばかり思

つていた」そして彼は鉢を調べた。「随分と厚い硝子だ。これなら少し位の事では毀れつこない。けれど、こんなに水が一ぱい入ってるんじや、溢こぼさずに動かすのは一寸六ヶ敷むずかしいな」さて、問題は鉢を動かすことだった。鉢の縁を持てば何うしても手袋を濡らしてしまふ。かと云つて、手袋なしでやれば指紋がついてしまう。そこで遂ついに片方だけ手袋をとり、指紋がつくのを防たぐ為めにはハンカチを用うることにした。そしてハンカチを巻きつけた手で金魚鉢の縁を掴み、一方の手で底を支えながら邪魔にならない所で置き換えた。それから水のついた指先を拭うと、その濡れたハンカチを衣か囊くしに収めた。

仕事は余りに樂過ぎて彼の器用な小手先を使う機会のないのは如何いかにも残念だった、でも宵から今に至るまで手て筈はずは万事好都合に運んでいた。彼は割合に目方のある彫像をカンバス製の袋に入れると、それを紐でしっかりと結え付けた。

「これで五千弗とはすまねえな」彼の顔には満足そうな微笑が漂った。

彼は扉ドアの方に向直つて電燈のスイッチを捻ろうとした。と、その時、みしつと云う幽かな音がしたので彼は思わずぎよつとなつた。彼は全身を緊張させて、その音を確かめようと耳をそばだてた。再び忍び足のような音がぼんやりと聞えて来た。彼の醜悪な容貌は恐しい事を予想しているらしく妙に強張こわばつた。そして音を立てない様に袋を床に置くと突然

電燈を消してしまった。室が真暗になるとスパイダーは元氣付いて来た。此の際誰か扉口から入つて来るとすれば場所は彼の方が遙かに有利だったから。

足音は又聞えた。彼の顛顛は動悸を打ち出した。彼は混乱した頭を敏捷に働かして、何処で失策をやったか夕方からの行動をじっくり考えて見た。それにしてもウッドワードは未だ帰らない筈だ。然し何者か扉に近づいてくる。

彼は何とかしなければならなかった。けれど足音は彼が今来た道筋を辿つて来る以上、後退は殆んど不可能に等しかった。然かも出口としては、その扉以外にない。残る手段は——彼は衣囊から棍棒を取出した。

そして凝つと待つていた。時間の経過は実に遅く彼には何時間か経つた様な気がした——と、その時扉がそつと開かれた。スパイダーは棍棒を握りしめ、扉の近くに身を寄せて息を凝らしていた。やがて丈の低い、ずんぐりした人影が室の中へこつそり這入つて来た。彼は最早躊躇しなかつた。満身に漲る衝動は彼を一氣に活躍させた。そして、ありつ丈の力をこめて相手の頭上に恐しい一撃を加えた。鈍い骨の砕ける様な音と共に闖入者は蹠めくと、そのまま床に倒れてしまった。

スパイダーは電燈のスイッチを捻つた。彼の心臓は早鐘のように動悸を打ち、息は烈し

く喘いでいた。そして瞳を凝こらして被害者の顔を覗き込むと、思わず驚愕の叫びをあげて、死体の上に蔽いかぶさる様に踞うすくまった。

「ドルガン！ スラッグ・ドルガンだ！」

だが、ドルガンは何のために此処へ来たのだろうか？ 若し彼がスパイダーの後をつけて来たとすれば、一体誰が彼に知らせたのだろうか？ 今日の仕事を知っている者はサデイの外には一人もない。ではサデイか？

スパイダーはサデイのアパートの裏手にある自動車庫ガレイジの道具箱に贓品ぞうひんを仕舞い込んだ。斯こうして置けばシモン・スヌッドに渡すまでは先ず安全だった。間もなくサデイが扉ドアを開いたので彼は中に這入って行った。

「何うかしたの？ スパイダー」

「何あに」と云いながら彼女の方に眼をやると、思いなしかその可愛い顔には不安と疑惑の影が漂っていた。何か胸に心配事を持っている——スラッグ・ドルガンの身を案じているのではあるまいか。いや確かにスラッグの事を懸念しているのだ。果して彼女は彼を裏切ったのだろうか——此の点は是非とも確かめる必要がある、と彼は考えた。

「それで、仕事の方は何うだったの？」

「うん、今夜は止めたよ。チャリーリーの所でつい歌留多をやり過ぎちやったからね——それじゃいけないかい？」

「だって——ウツドワードの仕事は今夜だって事をあなたから聞いていたから」

「そりあ、計画はそうだったさ。だが来週まで延ばすことにしたんだ」

彼女は不審な様子でスパイダーの顔を凝つと見詰めた。女と云うものは堅い殻を透して皮の下まで見抜く不思議な力を持っているものだ。彼は彼女に凝視されていると何だか気味悪くなつて来た。

「ええ、よくつてよ」彼女は皮肉に云つた。

「そんな嘘なんか、聞きたくないわ。ほんとに仕事は何うだったの？ 妾^{あたし}だって、此^{これ}には関係してるんじゃないやありませんか」

「しらばつくれなくてもいいだろう」彼は不機嫌な声で云いながら巻煙草に火を点けた。

「お前達は、皆んな知ってるんじゃないか——」

「お前達ですつて——あんた今夜何うかしてるわ」

彼女の冷静な態度はスパイダーを余計苛立たせた。けれどドルガンの事だけは、何うあ

つても彼女の口から聞き出さなければならなかった。彼は口先では到底彼女の敵でないことを知っていた。が、同時に彼女が彼の疑いに気付いて、スラッグに対する話を切り^{しき}りに誤魔化そうとしている様子も彼には感付かれていた。

「今夜スラッグに会つたらう」彼は不意に訊ねた。

「何ですって？」

「今夜スラッグに会つたかと聞いているんだ」スパイダーは繰返して云つた。

「あなたが真実^{ほんと}の事を云つて呉^くれなきや、妾だつて云わないわ——誰に会おうと妾の勝手じゃありませんか」

スパイダーは椅子から身を起した。

「おい、冗談に云つてるんじゃないぜ、俺は何うあつてもお前から聞き出すよ」

「出来るなら、やつて見るがいいわ」彼女は冷かす様に云つた。「あなたは少し気が小さい過るわ。そんなこと取越苦労と云うものよ。スパイダーともあろう者が、そんな子供染みた真似をするなんてみつともないわ。一体何うしたと云うの？」

「うん、もういいよ」彼は急に機嫌をとる様に声^{やわ}を和らげた。「酒でも飲もう。ほんとに今夜は何うかしているよ」

彼女は隣室に酒壇を取りに行つた。スパイダーは椅子に深く腰を下していたが、彼女が不安な面持で戻つて来るのを見ると突然立ち上つた。

「スパイダー。ちよつと」

彼は猫の様に敏捷に窓際へ跳んで行つた。

「ほら」と彼女は囁いた。「変な人がいるのよ」

向側の歩道に、丈の低い頑丈な、その癖服装みなりの小綺麗な男が立っていた。彼は薄暗い街燈の光を身に浴びながら時々それとなく此方こつちの窓を見上げて、切りにパイプを燻くゆらしていた。

「ありやマシユースだ」スパイダーの顔には在あり々と恐怖の色が現われた。

併しサデイには何の事か分らなかつた。

「マシユースというと——あの、探偵のマシユース？ 落付かなけりや駄目よ。そして皆んな話して頂戴。あんたは今夜仕事をしたのでしよう」

だが、スパイダーはサデイの言葉には耳を貸さなかつた。彼は強い酒を立て続けにあおつた。然し酒は彼の憤怒を強めたに過ぎなかつた。彼は顎を突出し眼に嫌悪の表情を浮かべて平氣を装おうとしたが、全身の顫えふるを打消すことは出来なかつた。

「奴はあそこで何をしてやがんだろう？」彼は壇を柵に置こうとして危く落す所だった。

「マシユースは何も知ってやしない。あんな奴に捕つてたまるもんか。おい、サデイ。お前、まさか俺を売りやしないだろうな」

「莫迦ばかなことを云つちや嫌だわ。そんな事誰がするもんですか。妾には何の為ためか分らないけれど、あんた今夜は嘘をついてるわね。だけど若しマシユースが来ると困るから、打合せだけはして置きましょうよ。妾は何と云つたらいいの？ さあ元氣を出して——もう直じきに此処へ来ることよ」

「まあ、いいさ。俺には考えがある——」と彼は云つた「マシユースは俺が巧くやるよ。兎とに角かくもう一杯ついでくれ。奴が変にからんで来たつて、俺にあ——」

その時扉ドアを叩く音がしたのでスパイダーは言葉を途切らせた。彼は坐いざ勢まいを正し昂たかぶ奮ふんつた神経を静めようとした。そして漸ようやくのことので平静に返つた時、サデイの開いた扉からマシユース探偵が這入つて来た。

「よう、スパイダー。丁度前を通り掛つたから、少しお喋りしようと思つて寄つたよ」

マシユースは自分で椅子を引寄せると悠々とパイプに煙草をつめ眼尻に皺をよせてにっ
と笑つて見せた。

スパイダーは濛々たる紫煙の間から探偵を見詰めて神経質に巻煙草を吹かしていた。そして苦虫を噛みつぶした様な顔をして黙り込んでいた。

「マツチはないかね。このパイプはほんとにマツチ喰いだ」マシユースは然う云いながらも周囲ぐるりの物に鋭く眼を働かせていた。そしてスパイダーが洩々差出したマツチを受取ると、「今夜は莫迦に御機嫌が悪いじゃないか。え、スパイダー」探偵はスパイダーの黙っているのには無頓着に、にやりとした「サデイと喧嘩でもしたのかね。そんな事は早く仲直りした方がいいよ。こじらすと始末が悪いからね」

彼はくつくつと笑った。

「時に近頃はサデイとドルガンのお揃いの所をよく見掛けるね」

スパイダーは探偵の冷やかすのを耳に入れまいとした。そして力つとめて平静を装って、

「何か変わったことでもあったんですか。マシユースさん」

「別に大した事もないがね」然そう云つて探偵は鼻から煙草の煙を出しサデイの方に不審いぶかしげな顔を向けた。

「スパイダーは今夜君とずっと一緒だったかい？」

サデイは血の気の失せた顔を強張らせた。彼女は去就に迷った。スパイダーは何と答え

るか知らないが、彼女の返事は彼の言葉と一致させなければならなかったから。探偵が彼女に先ず訪ねたのも恐らくこれを見抜いていたからかも知れない。と思うと、彼女は途方に暮れてしまった。

「そんな事は私からお話しますよ」

スパイダーは横合から口を出した。マシユースは穏かに笑って、

「それは何方どっちでもいいがね。唯サデイただに聞いて見たかったからさ。何かにサデイが、君が今夜此処こゝにずっといたことを証明して呉れればいいんだ。そうすれば僕は可かなり助かるかな」

「一体何を調べてるんです。マシユースさん、そんな謎みみたいな事をきいても、私には訳が分かりませんが」

「そりや然うだろう。では一つ今夜の事を話そうかね。だが、その前に——その衣囊はみだから食出はみだしてる手袋を見せてくれないか」

スパイダーは微笑を漏らした。矢張りこれだったのか？ マシユースは彼の手袋が濡れているか何うかに依よつて、彼がウッドワード家の金魚鉢ちよつとに触れたか否かを調べようとしているのだ。考えて見る、あの折一寸頭ちよつとをひねって手袋を濡らさずに置いたことは確かに

運がよかった。マシユースは頭がいいかも知れない、然し俺の方が遥かに上手き、とスパイダーは得意になった。

「さあ、何卒御覧下さい」と云いながら彼は手袋を探偵に渡した。

「それにしても一体何を調べるんです」

「そうさねえ」探偵はまだるい返事をした。

「仕事の手口を調べたいと思つてね。先刻サデイに訊ねたのも実はその事なんだ」

「サデイなんか聞いたつて駄目ですよ。此奴に何が分るもんですか」

「そうかも知れないね——所で話と云うのは、ウッドワード家に起つた事件なんだが、殺人と盗難があつたんだ。或る高価な彫像が今夜盗まれたのだが——ウッドワード氏は日曜版を印刷に廻わしてから可なり遅くなつて帰宅した。夫人は留守だった。で、帰つて見ると二階に電燈が点いているので早速調べて見たのだ。すると驚いた事には、今云つた高価な彫像が無くなつていた。勿論保険はつけてあつた。が、犯人は同時に人殺しをやって行つたのだ。死体は床にあつたので氏はもう少しで躓く所だった。警察本部へは直に電話が掛つた、そこで僕は部長の命令でウッドワード家へ馳付け事件を調査したという訳なのだ」
 そして更に附加えて「で目下犯人捜索中なんだけど、何れ捕まれば死刑だろうな」

死刑と聞くとスパイダーの顔色は変った。

「また貴方のお手柄になるのでしょうか」

「然うなればいいがねえ。併し今度のは巧くゆきそうなんだよ。此の事件には特殊な事情があつた。と云うのはウッドワード氏が道楽に化学を研究していた事なのだ。氏は地下室に研究室を設けて絶えず新しい化合の現象を研究していた。その結果或る液体を発見したのだが、それは一見した所水の様で然かも金属を腐蝕させぬ性質を持っている。氏は試験的にその液体を金魚鉢に入れ、中に金属製の金魚を入れて置いた。以来一年余りになるが、その金魚は少しも錆びないのだ」

「それが犯罪と何んな関係があるのです」スパイダーは一寸気になつたが然気ない風を装つていた。

「まあ、待ち給え——その金魚鉢は彫像の前に置いてあつた。だから彫像を盗ろうとすれば、邪魔になる鉢は何うしても他の場所へ移さなければならぬのだ。所で、その鉢というのが、相当目方のある上に滑々すべすべとして扱ひ悪い代物と来ている。手をかける所は縁以外にはない。おまけに、縁に手をかければ指先は濡れるにきまつている——僕が手袋を見せて呉れと云つたのは詰りつま斯こう云う訳だつたのさ」

「そうですか」スパイダーは皮肉に云った。

「じゃ、よく見て下さい。だが、私のは濡れてはいないでしょう」

「うん、乾いている。僕もこれで安心したよ。けれど先刻も云った通り、いい加減に機嫌を直し給えよ。だが、スラッグ・ドルガンは——」

「其奴の事はもう止めて下さい」スパイダーは真赤になって云った。「何故スラッグ・ドルガンの事ばかり云うのです？」

「でもねえ、今夜殺された男と云うのは実はドルガンだったのだ。所で、これは僕の感違いかも知れないが、君はドルガンを嫌っているらしいね——まるで毒の様に」

「そんな事は何うでもいいじゃありませんか。マシユースさん。あんた方は兎角つまらな^{とかく}い事を穿くり出しては人を嫌がらせる癖がありますね。ええ、私はドルガンは虫が好か^{ほじ}なかつたのです。何う云う訳か気が合わないでね。そこへ持って来て、しよつ中サデイの跡を追い廻わしていたので実は癩でたまらなかつたんです。けれど、貴方はそんな事に口を出す必要はありませんぜ」

「そうとも君の云う通りだよ」マシユースは帰ろうとして立上った。「では、手袋は返えすよ。ほんとに濡れていなくて幸^{さいわい}だった。けれど今話した金魚鉢の液体については未^まだ面

白い事があるんだよ。ウッドワード氏の云うには、それが若し水と混じる様な事があると、直ぐに赤くなるのだそうだ。丁度リトマス試験紙みたいな物だね。だから賊の奴が鉢を動かす拍子に手を濡らしでもすれば、奴は後で手を洗った時、赤くなったのを見てさぞ驚くことだろう。そして一旦赤くなつたが最後少し位洗つたのでは容易におちないそうだ。一寸面白いじゃないか。つまり我々は赤い手の男を探せばいいと云う事になるからね」彼は大声で笑いながら帽子を取上げた。

「では又近い中に来るよ。お休み。サデイ」

「何しろマシユースの奴は頭がいいからな」スパイダーは独りで呟いた。「だが、まさか俺がしたとは思っていないだろう」

サデイは突然彼の腕を掴んだ。

「矢張りあんたはウッドワードの所へ行つたのね」彼女は自信あり気に云つた「そして妾やつぱにその事が云えなかつた訳は——あんたはスラッグを殺したのでしよう」

スパイダーは彼女の眼を見ると何か責められる様な気がして竦すくんでしまった。彼は壇壇からもう一杯酒を注いだ。彼はサデイに卑怯者と云われるのが辛かつた。彼女はひよつとす

ると真相を知っているのらしい。いつその事彼女に打明けてしまおうか——。

「如何にも俺はドルガンを殴り付けた。それが少し力が入り過ぎたらしいんだ。けれどそんな所へ出しやばるのは奴の方が悪いじゃないか。俺には奴が誰から俺の仕事を聞込んだか、それが不思議でならないのだ」

「矢張りそうだったの？」サディは眼を異様に輝かせた。「誰がドルガンに教えたかって——あなたは妾だと思ってるんでしょう。だけど、あなたには妾にそれを聞く資格はないわ。卑怯者！ 人殺し！ 全く笑えるわ。それで今夜ドルガンの事を執拗しつこく聞いた訳が分った。ええ、妾は今夜ドルガンと会ったわ。けれど、あなたがもう少し利口だったら、妾がドルガンに何んな事をしたか想像がつく筈よ。あなたは嫉妬やきもちのために眼が晦くらんでいるのね」

スパイダーは顔を痙攣させた。

「ドルガンも矢張りあそこで探す物があつたのよ」サディは語り続けた「妾はそれが何だか知れたかつたの。だから妾は色々あの人に鎌を掛けて見たんだわ。そんな事も察しないで、ほんとお馬鹿さんねえ。だけど直きに探偵達はあなたに眼をつけるわ。そうすれば何うなると思うの」

「うるさいな」スパイダーは恐しい光景を眼前から消そうとして眼を閉じた。

「俺は巧くやったつもりだ」彼は床を歩きながら喋り続けた「誰が俺を捕えることが出来るもんか。奴等は何んな風にして俺に嫌疑を掛けようてんだ。俺はマシユースの眼だつて巧く誤魔化したじゃないか」

「マシユースはあれだけで諦めやしなくつてよ。彼奴は一旦眼をつけたものは、それを捕える迄^{まで}は猟犬の様に執念深くつけ廻わすそうじゃないの。その上、あの液体の話も何だか真実^{ほんと}らしいわ。あんたは鉢で手を濡らしたのでしょうか？」

「あんな事は出鱈目だよ」スパイダーは彼女の心配を嘲弄し去った。「マシユースは俺達をからかっているんだ。実を云やあ、俺は指とハンカチを濡らしたが」

「何だか真実^{ほんと}らしいわ」サデイは尚も剛情を張った「何故もつと用心しなかつたの」

「用心たつて！ あんな重い水の一ぱい入った、然も滑り容い金魚鉢を運ぶんだぜ。そんな時に、内容^{なかみ}が水でないなんて、誰が気がつくものか。俺はマシユースの言葉は信用しないよ。奴は冗談に云つただけだよ」

「然うじゃないわ。抜目のないマシユースの事ですもの。唯隙を狙っているだけよ。あの人は一度狙いをつけたら藁一本だつて外さないと云う噂じゃありませんか。それに、あの

液体の事が真実ほんととすると犯人を見分けるのも一層楽になるし——」

「だけど、ありや嘘だよ。そんな莫迦なことがあつてたまるもんか。何しろ此処に濡れたハンカチがあるから、一つ試めして見ようじゃないか」

スパイダーは台所へ行くと、ハンカチを水道の承口うけぐちにかざした。

「若し話の通りだとすれば、結果は直ぐに表われる筈だよ。けれど、ほら何うもならないじゃないか。ね、一体——」

彼は愕おどろいて話を止めた。そして両眼がんを大きく睜みひらいた。手に持っているハンカチは次第に桃色から赤に変わり、それをかざしていた手も同じ様に赤く染って行つた。

「あら、真実ほんとだわ」サデイは思わず叫んだ。

「マシユースの云つた通りだわ」と云いながら彼女は振向くと何を見たのか息塞いきづまる様な声を発した。彼等の背後うしろに扉口との所に佇たたくんでいる人があつた。それはマシユースだつた。彼は相変らずにやにやしなから、その眼は決定的な証拠品を凝つと見詰めていた。

「うふ、ふ」と彼は愉快そうに含ふく笑みわらいした。「好奇心が猫を殺した、と云う奴だね。君は屹度水きつとで洗うだろうと思つたよ。だからこそ又戻つて来たと言ふ訳さ。可なり大胆な推量だつたが案外功を奏したね。これじゃ何うしても死刑もんだな」と云いながら彼は衣囊か

ら手錠を取出した。

「何だつて？」スパイダーは怒鳴つた「こんな事あ証拠になるもんか」

「まあ、いいさ」探偵はスパイダーの言葉に動ずる気色もなく快活に云うのだった「それは判事の前で云つて貰おうよ」

手錠はかちツと音がして彼の腕に掛けられた。スパイダーは此の音にはつとなつてマシユースの方へ恐しい見幕で突進しようとした。が、それは無駄だった。探偵はひらりと体をかわし、扉口に拳銃ピストルを擬して立っていた部下を差招いた。

「まあ、落ち付きたま給え。スパイダー。此のシン普森君のお蔭で、自動車庫ガレージから贓品と棍棒を発見したよ。証拠はすっかり挙あがつている。では、ぼつぼつ出掛けよう」

サデイの方に振向いたスパイダーの顔は自暴自棄そのものだった。彼は舌が纏もつれて何も云えないらしく黙つて彼女の顔を見ていた。やがて頸をうなだれ、重い足を引摺りながら、探偵の後から外に待たしてある自動車の方へ下りて行つた。

スパイダーの頭は錯乱して、僅わずか数時間内に起つた出来事を回想することすら出来なかつた。彼はぼんやりと探偵の傍に腰掛けていた。

自動車は警察本部を指して滑らかに走つていた。マシユースはすっかり上機嫌になつて

快活に喋り出した。

「全くたわいないものさ」と彼は出し抜けに云った。「僕等は先ず第一にあの様な彫像に眼をつける奴を考えて見た。そしてスヌツドが何うもそれらしいと云うので、今度は奴の所へ出入りする連中の名前を並べて見た。色々調べて行く中にスラッグ・ドルガンと君と、それから二、三の奴の名前に行き当たったが、更に篩ふるいに掛けて遂に君とスラッグが残った。所がスラッグはあの通り殺されているし、最後に到頭君だけが残ったと云う訳だ。

探偵の言葉は更に続いた。

「けれど僕が迷った事はスラッグが何うして君と同じ晩に然かも同じ仕事に手を出したかと云うことだ。そこで僕は、こりやスヌツドが然うさせたのではないかと考えて見た。恐らく奴はあの品の買手がいたので、何うしても手に入れる必要があつたのだろう。その結果君等二人にやらせれば一層確実だと思つたんだ。で、スラッグも今夜君と同じ仕事をしに忍び込んだ。だが、君の方が一と足早かった、と云うのさ——あ、丁度警察へついたらよ」

青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集 全一卷」作品社

2005（平成17）年9月15日第1刷発行

底本の親本：「探偵」

1931（昭和6）年8月

初出：「探偵」

1931（昭和6）年8月

※「残ったと云う訳だ。」の最後に閉じ括弧がないのは底本の通りです。

入力：門田裕志

校正：湖山ルル

2014年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い手

国枝史郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>